

## こかわ 小川（入曾用水）

狭山市人間地区は広大な武蔵野台地の東方に位置し、およそ七万年前に青梅から流れ出た古多摩川の扇状地の上にある。表層は黒ぼく土、次の層は約一メートルの赤色をした立川ローム層、その下に二十メートルに達する砂れき層がある。砂れき層は水を通しやすく、この地区は水を得るのに大変苦勞する所であった。人間が生活する上で最も重要な水を得るためには井戸を掘るか、用水路を引くか、雨水を溜めるしか方法はない。ここの人たちは何世代にもわたり水を得る努力を重ねてきた。

中世、郷村の入曾村では、七曲の井が飲料水などの生活用水として使われてきたが、人口が増加するにつれて井戸だけでは不十分になると用水路を掘削した。これが小川（入曾用水）である。人間市宮寺から流れ出る林川から用水を引き込み、村の中央で二つに分け村民が利用していた。その間の長さは約三・三キロメートル、深さ約三十センチメートル、川幅約一・八メートルである。天正六年（一五七八）に出された史料には「用水をみだりに掘り崩す者がいたならば、嚴罰に処する」と書かれてあるので、それ以前には入曾村民に使用されていたらしい。

近世、水野村は寛文六年（一六六六）に立村し、十カ所の井戸が掘られたが不十分であった。そこで、延宝二年（一六七四）に水野村の名主権左衛門外組頭三名が中心となって、南入曾村の名主市郎兵衛に用水の分水を頼み込んでいる。元禄十二年（一六九九）の誓約書には次のような条件が付けられている。

一分水の取水口は、南入曾村の指図に従い、我がままは言わない。  
一 往來の小橋二カ所は水野村で架け、人馬の通行が不便にならないようにする。

一 用水路のしゅんせつや草刈は少しも不平を言わない。たとえ水量が少なくなっても申し立てをしない。

一 用水の余りは、水野村以外には一切流さない。

このように多くの困難を抱えていたが、この分水により水野村の十八軒の農民たちは大いに助かったのである。

江戸時代、飲料水などの生活用水には井戸や用水路が貴重な存在であり、台地の畑作地の村は水を得るのに大変苦勞していた。不老川を「大川」と言うのに対し、この用水は「小川」と呼ばれ南入曾村と水野村の村民に親しまれていた。また、水量の少ない時には水野村の名主屋敷地で地中にしみ込んでしまうので、末無川」とも呼ばれていた。入曾用水は昭和二十年代まで深さ三十センチメートル位のきれいな水が流れ、魚がすみ、冬でも水が涸れる事はなかったそうである。新座市では野火止用水を復活し、清流を通すことによつて市民の心に潤いを与えている。入曾用水も何らかの方法で、貴重な文化財として残されることを願わずにはいられない。